

令和 4 年 6 月 16 日現在

機関番号：32623

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2021

課題番号：17K01914

研究課題名（和文）保育所における食事援助の質向上を目指す研修ツールの開発：多職種アプローチを通して

研究課題名（英文）Development of training tools to improve the quality of feeding assistance in nursery schools: An examination of multidisciplinary collaboration

研究代表者

遠藤 純子（Endo, Junko）

昭和女子大学・人間社会学部・准教授

研究者番号：00634297

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、保育所における乳幼児の主体性を尊重した食事援助のあり方を検討し、乳幼児の主体性を尊重した食事援助を学ぶための研修ツールを開発することを目的としたものであった。乳幼児の主体性を尊重した食事援助は、時間の環境・環境構成・食事援助の担当方法・職員間の連携といった諸要素が複合的に作用することが実現の支えとなることが示された。さらに、多職種の職員が観察等を通して子どもの姿を共有し、悩みを話し合うことの重要性が示唆され、研修ツールには実践的な側面と共に、「子どもの主体性の尊重」「子ども中心の視点」といった側面を内包し、職員間の対話の中で考えを深める契機となる要素を含むことの必要性が示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

0～2歳児の保育所利用率の増加により、乳児保育の重要性が高まるとともに、保育の質の確保・向上が求められている中、本研究では、乳幼児の生活の中核となる食に焦点を当て、質の向上に向けた保育方法の提案を事例検証的に行い、研修ツールを開発した。乳幼児の主体性を尊重した食事援助を支える諸要素を明らかにしたことは、食事援助を支える構造的要因を見つめ直す糸口となり、保育現場にとって意義ある提案となるものと考えられる。そして研修ツールは、養成・現職教育の充実に貢献できるものであり、乳児保育の「質の保障」という社会的要請に応えるものであると言える。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to examine feeding assistance that respects the independence of infants in nursery schools, and to develop training tools for learning feeding assistance that respects infants' independence. It was shown that feeding assistance that respected the independence of infants supports the realization that various elements such as adjusting mealtime, the environmental composition, the method in charge of feeding assistance, and cooperation between staff work. In addition, it was suggested that it was important for multi-disciplinary staff to understand what children are doing and discuss their worries through observation. Therefore, the training tool should include practical aspects as well as aspects such as "respect for children's independence" and "child-centered perspective", and to include elements that can be used to deepen thinking in dialogue between staff members.

研究分野：保育学

キーワード：食事援助 協働 研修ツール 保育の質の向上 離乳期 乳児保育

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

0~2歳児の保育利用率が大きく増加しており、乳児保育の重要性への認識が高まっている。中でも食事は、年齢が低いほど生活に占める割合が大きいため乳児保育の重要な要素となる(厚生労働省, 2016)。食への興味が芽生え、生きる力の基礎を育む上で大切な時期である乳幼児期に、食への主体性を尊重した援助を積み重ねていくことが重要である。特に食のスタートとなる離乳期は、「自分で食べる」という食への主体的行動が獲得されていく時期であり、保育士が「子どもが自分で食べる姿勢」を尊重すること、栄養士を含めた調理従事者(以下、栄養士等と記す)が「子どもが自分で食べたくなる」料理特徴を配慮して調理することが必要であり、保育士・栄養士等双方の連携が不可欠である。しかしながら、保育士・栄養士等ともに乳幼児の食事援助方法を学ぶ機会は養成課程・現職研修共に乏しく、適切な援助や連携のあり方への認識が薄い現状がある。保育士の食事援助方法の獲得は経験則に拠るところが大きい。そのため質のばらつきがあり(森田・高木, 2013)、大人の思い通りに乳幼児の食行動を調整しようと主体性が軽視される場面も見受けられる(小林, 2015)。質の向上を目指すためには、あるべき援助や環境構成をより実践可能な具体的な形で伝える必要がある。保育の場に蓄積されている経験知を言語化し、保育に携わる者が理解可能な形で伝えることが、主体性を尊重した援助へ、ひいては乳幼児の食への主体性の育ちにつながると考える。

食の作り手である栄養士等は、発達段階に応じた食事提供が求められる。一方、食の与え手は保育士である。栄養士等は、発達段階に応じた食事を提供できているか判断するためには保育士からの伝達や、自らが食事場面に足を運ぶことが必要である。しかし保育現場における職種間の連携は十分とは言えず(西尾・佐藤・小塚・杉村, 2012)、職種間の連携状況の調査もなされていない。

こうした現状を踏まえ、保育現場における保育士・栄養士等双方の乳幼児の主体性を尊重した食環境作りの現状と課題を明らかにした上で、多職種へのアプローチを視野に入れた学びの機会を提供するべく研修ツールを開発することが食事援助の質向上につながると考えた。

2. 研究の目的

本研究では食事援助の質向上を目指す研修ツール開発を目的に、以下3点を課題とした。

- 【課題1】保育士・栄養士等の食事援助に関する現状把握
- 【課題2】食への主体性を尊重する食事援助・環境構成のあり方の検討
- 【課題3】養成教育・現職教育を視野に入れた研修ツールの開発

3. 研究の方法

本研究では、目的に示した3つの課題を軸に研究を進めた。以下に研究の方法を示す。

- 【課題1】保育士・栄養士等の食事援助に関する現状把握

平成29年11月に、全国1321園の保育所に勤務する0歳児担当保育士・栄養士等を対象に無記名自記式質問紙調査を実施した。0歳児担当保育士対象の質問項目は、対象保育所・回答者の基本属性、食事援助における悩みごと、食事場面の環境構成、子どもの食に関する養成教育と現職研修の機会についての全32項目とした。栄養士等対象の質問項目は、回答者の基本属性、給食提供状況、0歳児クラスの食事提供と環境設定、0歳児クラスの園児・保育士とのかわり、子どもの食に関する養成教育と現職研修の機会についての全30項目とした。

- 【課題2】食への主体性を尊重する食事援助・環境構成のあり方の検討

保育所における食事場面のビデオ観察データを収集する。並行して研修ツールで使用する食事場面の映像の撮影を保育所にて行う。収集したビデオ観察データを用い、保育士の援助方法について分析を行う。望ましい食事援助・環境構成についての仮説を立て、研修ツールの視聴覚教材に使用する場面の選定と構成、テキストの作成に着手する。

- 【課題3】養成教育・現職教育を視野に入れた研修ツールの開発

研修ツールは、質問紙調査の結果や観察データで得た知見等をもとに、a)援助の実際と配慮、b)環境構成、c)調理の実際と配慮、d)職種間の協働といった4つのテーマから構成する。内容は、食事場面を事例に多くとりあげ、演習の要素を取り入れる。研修ツールは協力園での園内研修で使用し検証を行い、現職保育士・栄養士や園長の助言をもとに改善を行う。

4. 研究成果

- 【課題1】保育士・栄養士等の食事援助に関する現状把握

返信のあった531件のうち、保育士対象の調査は507件を分析対象とし(有効回答率38.4%)、栄養士等対象の調査は495件を分析対象とした(有効回答率37.5%)。

(1) 保育士を対象とした調査

食事援助における悩みごと: 7割以上の保育者が悩むと回答していた項目は「噛まない」「偏食」「食物アレルギーへの対応」であった。0歳児担当回数との関連をカイ二乗検定で検討したところ、「噛まない」「食物アレルギーへの対応」は担当回数との有意な関連はみられず、経験を重ねても悩む保育士が多いことが分かった。

食事場面にかかわる諸要素: 離乳期の食事時間の設定にあたっては一人ひとりへの配慮ができるよう食事時間調整を行うことが望ましいが、時間差で食べ始める園は35.1%であった。またこの時期は、咀嚼機能の発達や食への意欲の育ち等を保育者が細かに理解し、子どもの育ちに

応じた援助や環境構成を行うことが求められることから、特定の保育者が継続的に特定の子どもを担当することが求められるが、「食事援助の際に担当する子どもはいつも決まっている」園は21.5%であった。食事時間調整と、食事援助の担当方法との関連を検討するため、²検定を行った結果、有意差が認められた($p<.01$)。残差分析を行った結果、「担当する子どもはいつも決まっている」は時間差で食べ始める園で有意に多かった。担当する子どもがいつも決まっている場合、保育者は担当する子どもの生活リズムや空腹のタイミングなど一人ひとりの状況を継続的なかかわりの中で詳細に理解しうが、そうした理解が一人ひとりへの配慮をもって時間の環境を考えるとといった配慮につながるのだと推察する。また、食事時間調整と食事時に座る場所との関連にも有意差が認められ、「保育者の膝」($p<.01$)は時間差で食べ始める園で有意に多く、「ベビーチェア」($p<.01$)は全員同じ時間に食べ始める園で有意に多かった。「保育者の膝」で食事をする場合には一対一での食事となることが多く、時間差で食べ始める必要があると推察する。ベビーチェアの場合、まだ一人で座ることが難しい時期であっても保育者の補助なしで座ることができる。全員同じ時間に食べ始める園で有意にベビーチェアの使用が多かった結果からは、全員一緒に食べ始める状況下で、複数の子どもの援助を一度にする場合にベビーチェアが使用されていることが推察される。しかし、一人の保育者が複数の子どもを同時に援助すると、口の動きに丁寧に応じながらの援助は難しく、保育者側のペースで援助せざるをえない場合も多い。一人ひとりの子どもの主体性を尊重した食事援助を実現するためには、食事時間調整と食事時に座る場所と双方の視点から環境を見直すことが必要であると考えられる。

食事の環境に関する評価：よりよい食事援助を行うための食事環境を「不十分と感じる」ものは22.8%、人員配置を「不十分と感じる」ものは38.3%であった。食事時間調整との関連を検討するため、カイ二乗検定を行った結果、「食事の環境設定」で有意差が認められ($p<.05$)。残差分析を行った結果、食事の環境設定を「不十分と感じる」は時間差で食べ始める園で有意に多かった。時間差で食べ始めるには、食事・遊び・睡眠が同時進行となる可能性があり、食事・遊び・睡眠それぞれの空間が必要となるため、より充実した環境を必要と感じることが推察された。

離乳期の食に関する養成教育と現職研修の機会：養成教育で十分に学んだと回答した項目は、離乳期の「食機能の発達」63.8%、「調理形態」60.3%、「食事介助」46.7%、「環境設定」42.8%、「食具」38.9%であった。現職での離乳食に関する研修の受講経験が「一度もない」は42.7%であり、現職での離乳食に関する学びの機会は十分でないことが推察された。さらに、離乳食研修の参加頻度は、経験年数との関連があり、経験年数が低い保育士ほど離乳食研修の参加経験が少ないことが示唆された。しかし保育現場の実情を鑑みると、離乳食に関する研修に多くの職員が参加することは容易ではないため、簡便に研鑽を積める研修ツールの開発は効果的であると考えられ、なおかつ経験年数の少ない保育士にはより有効であると考えられた。

(2) 栄養士等を対象とした調査

食事提供の悩み：「悩む」割合が高かった項目は、「食材の大きさ」77.0%、「食材のかたさ」72.3%、「食材の種類」67.8%であった。一方、「悩まない」割合が最も高かった項目は、「ミルクの量」で74.7%、次いで「食事環境」71.2%、「介助方法」66.5%、「食具」60.8%であった。栄養士等は「食事内容」に関することに意識が向いている傾向にあり、子どもがどのような環境で食べるかについてはあまり悩まないと推察されたが、研修参加経験と食に関する悩みとの関連を検討したところ、「食事環境」の項目のみで有意な関連が認められ、研修に複数回参加した栄養士等は「ときどき悩む」が有意に多かった。研修で学びを重ねること、食事環境といった側面にまで目を向けるようになることとの関連が推察された。

保育士との連携：「離乳食開始時期」「段階をあげる時期」は9割以上の栄養士等が保育士と話し合うと回答したが、「食事で座る場所」「椅子やテーブルの高さ」等を話し合うと回答した栄養士等は2割に満たなかった。また、ほぼ全員の栄養士等が食事場面の観察が必要と回答したが、実際の観察頻度は週1回未満が半数ほどだった。また、保育士との話し合いや観察頻度と園児一人ひとりの食べ方の把握についての自己評価との関連を検討するため²検定を行った結果、話し合いの頻度が「ほぼ毎日/週3~4日」の群および観察頻度が「ほぼ毎日/週3~4日」の群で一人一人の食べ方を把握できていると思うと回答した者が有意に多く(ともに $p<.001$)。観察や話し合いが一人一人の食べ方の把握には有用であることが示唆された。さらに、観察頻度の高さに関連する要因を検討するために、観察頻度と経験年数や離乳食研修参加経験の有無との関連を分析した。その結果、観察頻度は経験年数と関連はなく、離乳食研修参加経験がある場合で観察頻度が高く($p<.05$)、研修での学びの経験が協働を深める要因となる可能性が示された。

養成教育・現職研修の機会：「調理形態」50.4%、「食べる機能の発達」49.6%は養成課程で十分に学んだと回答した。一方、「食事場面の環境設定」23.1%、「食具」22.8%、「食事介助」20.5%と、十分に学んだと回答したものが2割ほどの項目もあった。養成課程で離乳食と幼児食の両方の調理実習を行ったことのある者は28.6%であった。離乳食のみ、幼児食のみを合わせても調理実習経験者は53.0%であり、約半数の者が調理実習経験なく現場に出ている可能性が示された。さらに、現職での離乳食研修に参加経験のない者は25.6%であった。保育所栄養士を志望する学生や現職の栄養士等が自主的に学ぶことができる環境づくりや研修機会を整えることが必要である。

【課題2】食への主体性を尊重する食事援助・環境構成のあり方の検討

(1) ビデオ観察データの収集・分析

都内認可2保育所0歳児クラスにて月1~2回の頻度で食事場面の観察調査を行い、完全援助の時期から自食へと移行する時期である月齢8か月~11か月にあたる回を分析対象回とし、在籍する女児4名(撮影時の月齢8~11ヶ月)と対象児を担当する保育者2名(X・Y)について、相互のやりとりを言語的調整・身体的調整の2つの視点から分析した。X保育者は子どもが「食べ物を口にする」ことに意味づけ 賞賛 といった言語的調整が多くみられた。Y保育者は子どもと同じ動きを自らの身体をもって行うことで、「食べる」プロセスそのものを共時的に経験する 共時的咀嚼 が多くみられ、口の動きの観察をした上でのスプーンの運び、身体的な同期などが観察され、児の「食べている状態」を共に感じようとした上での援助を行っていた。子どもが食べたくなるよう誘いかけ励ます援助であることは共通しているが、「食べる」といった結果を求める援助と、食べるプロセスを感じ取り応じていく援助と、それぞれの援助特性があることが示された。子どもが感じ取っていることを保育者も自らの身体を通じて感じ取るうとすることが、子どもの食べるプロセスやタイミングを感じ取ることにつながることが分かった。表面的な行動を変えることにとらわれるのではなく、子ども内面に生じていることを感じ取る契機を養成・現職教育の場で提供する必要性があると考えられる。

(2) Eating-Feeding 相互模擬演習の検証

離乳期における食事援助の際には、保育者は子どもの発する視線や身振り等のサインから子どもの思いを汲み取り、その思いに応じるべく、タイミングや一口量を見計りながら援助することが必要となる。そのためには、子どもの発するサインを汲み取り、口の動きを観察し、咀嚼の状況を理解できる力が求められる。しかし、子どもの咀嚼・嚥下といった口の中で生じる一連の流れは外面から観察することが難しく、視覚的な観察だけでは理解しにくい。そのため、食事援助を学ぶにあたっては、子どもの発するサインから子どもの思いを汲み取ること、そして子どもがどのような口の動きをしているのか体感的に理解する機会が必要だと考える。そこで、ビデオ観察データの分析から着想を得て、子ども・援助者双方の立場を「タイミング不一致パターン」「共時的咀嚼パターン」の2つの条件下で体感的に経験する Eating-Feeding 相互模擬演習を考案し、保育士養成課程の学生を対象に実施した演習での気づきを分析した。タイミング不一致パターンでは、子どもの立場では<不快感><食べることへのマイナスの効果>、援助者の立場では 戸惑い 苛立ち が挙げられた。共時的咀嚼パターンでは、子どもの立場では 咀嚼へのプラスの効果 安心感 が挙げられ、援助者側では 子どもの咀嚼の状況の理解 心のゆとり 等ポジティブな感情の生起に分類される記述がみられ、「子どもと共に味わおうとする」援助の有効性が示された。相互の関係の中で生じる「楽しさ」「安心感」が、日々の生活に欠かすことのできない食事場面で体現されることは、人に対する基本的信頼感を培っていくこの時期には特に大切にされるべきものである。「子どもにとってどうか」という視点で考える契機を研修ツールの中に内包する必要性を示唆した。

【課題3】養成教育・現職教育を視野に入れた研修ツールの開発

(1) 研修ツールの作成

課題1・課題2での知見をもとに研修ツールの内容を構成し、認可保育所3園の協力を得て、食事場面、調理場面、保育士・栄養士等のインタビューの撮影を行った。撮影データをもとに「食事援助の実際と環境」「保育所の離乳食の実際」の2本の視聴覚教材を研修ツールとして作成した。研修ツールは食事援助の質向上を目指し、食事場面における子ども姿と援助のポイントについて、映像をもとに分かりやすく示し、子どもの主体性を尊重した援助や環境構成を考える契機となるような演習を含んだ内容とした。

(2) 研修ツールを用いた園内研修の検証

都内保育所2園(A園・B園)において、研修ツールを用いた園内研修を令和元年11月・12月に実施し、園内研修終了後に記載したワークシートを分析した。分かりやすかった内容として<子ども・援助者を体感する演習>が最も多く挙げられ、相互模擬演習を経験することで子どもの立場になって考えることができたことが述べられていた。同時に援助者を体験することも、援助のあり方を意識化・言語化し、客観視する機会ともなっていたことが読み取られた。同時に、職員が映像視聴のみならず、演習で共通の経験をすることで、子ども理解や援助への気づきを共有し、共通の意識をもちうることに意義があることも示された。また、A園の保育者が多く言及した 口の動き は、B園の記述にはみられなかった。B園には、離乳初期・中期にあたる時期は受入対象でないため、離乳の進行に伴う口の動きの発達的变化への学びのニーズは、そう高くないと推察する。A園では生後57日からの受入れをしているため、各離乳時期の食事援助にあたっており、目の前の子どもの姿との照らし合わせや学びへの必要性を感じていることで、理解が深まったと推察する。現職での学びの機会があることで、より子どもの姿がイメージでき、「当事者性」が子どもの姿をより詳細に理解しようとする関心をもつと考える。養成教育とともに、現職でも学ぶことのできる環境の充実がなされることで、理解の深まりが期待されると考える。一人ひとりの主体性を尊重した援助を実現するためには、課題1の質問紙調査の結果で示されたように、時間の環境・環境構成・食事援助の担当方法・職員間の連携といった保育構造の諸要素が、複合的に作用することが必要である。乳児保育における食は、保育士のみならず栄養士・調理従事者、看護師など多職種が専門性を発揮しうる側面であり、職員間で対話を積み重ねることが園全体の協働を深めていく。そうした対話を引き出す役割が内包された研修ツールの開発は、養成教育・現職教育双方の一助となるものであると考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計15件（うち査読付論文 9件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 10件）

1. 著者名 遠藤純子・小野友紀・池谷真梨子・田中浩二	4. 巻 6
2. 論文標題 乳児保育における食事援助のプロセスの質を支える諸要素の検討	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 保育者養成教育研究	6. 最初と最後の頁 1-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 遠藤純子	4. 巻 956
2. 論文標題 乳児保育の質をめぐる現状と課題 関係性をベースとした保育の展開に向けて	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 学苑	6. 最初と最後の頁 2-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 小野 友紀	4. 巻 20
2. 論文標題 園児の食事活動への参加過程 - 園児はどのように自分の食事を盛り付けるようになるのか	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 質的心理学研究	6. 最初と最後の頁 207 ~ 223
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24525/jaqp.20.1_207	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 遠藤純子・小野友紀・池谷真梨子	4. 巻 944
2. 論文標題 離乳期における保育者の援助特性に関する一考察 自食移行期の言語的調整と身体的調整に着目した事例的検討	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 学苑	6. 最初と最後の頁 2-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 遠藤純子・小野友紀・池谷真梨子	4. 巻 39 (529)
2. 論文標題 0歳児の食に関して保育士は何に悩んでいるか 学びの機会の必要性を考える	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 アレルギーの臨床	6. 最初と最後の頁 57-59
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 池谷真梨子・小野友紀・遠藤純子・田中浩二	4. 巻 61
2. 論文標題 保育所に勤務する栄養士等を対象とした離乳期における食の学びに関する調査	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 和洋女子大学紀要	6. 最初と最後の頁 153-163
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 酒井治子、會退友美、池谷真梨子、久保麻季、倉田新、坂崎隆浩、林薫、淀川裕美	4. 巻 9
2. 論文標題 保育所・認定こども園における食を通じた保育者の専門性に関する研究 セルフチェック票の提案	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 保育科学研究	6. 最初と最後の頁 18-43
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 遠藤純子・小野友紀・池谷真梨子	4. 巻 932
2. 論文標題 「乳児保育」における食事援助の学びについての検討 Eating-Feeding相互模擬演習を体験した学生の気づきから	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 学苑	6. 最初と最後の頁 17-27
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 小野友紀・遠藤純子・池谷真梨子	4. 巻 16
2. 論文標題 A保育園における多職種参加型園内研修に関する考察 食事援助場面映像および「Eating-Feeding相互演習モデル」の有用性の検討を通してー	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 武蔵野学院大学日本総合研究所紀要	6. 最初と最後の頁 53-62
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小野友紀	4. 巻 33
2. 論文標題 保育所給食が自園の調理室で調理されることの意味に関する一考察	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 武蔵野短期大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 39-47
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 酒井治子, 會退友美, 池谷真梨子, 久保麻季, 倉田新, 坂崎降浩, 林薫, 淀川裕美	4. 巻 9
2. 論文標題 保育所・認定こども園における食を通じた保育者の専門性に関する研究 セルフチェック票の提案	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 保育科学研究	6. 最初と最後の頁 18-43
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 遠藤純子・小野友紀	4. 巻 920
2. 論文標題 保育所における食をめぐる多層的な問題へのアプローチに関する考察 保育者の葛藤やジレンマに着目して	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 学苑・初等教育学科紀要	6. 最初と最後の頁 32-51
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 遠藤純子	4. 巻 3
2. 論文標題 保育実習事後指導における振り返りの意義と課題～関係性と時間性の中で生じるストーリーに着目して～	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 昭和女子大学現代教育研究所紀要	6. 最初と最後の頁 63-73
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 坂ノ下典正、尾崎史浩、大澤謙二、安藤智教、平岡康隆、清水和正、濱洋平、鈴木啓之、水口俊介、池谷真梨子、柳沢幸江	4. 巻 27
2. 論文標題 チューインガムの咀嚼回数および咀嚼頻度について	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本咀嚼学会雑誌	6. 最初と最後の頁 2-9
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 池谷真梨子、柳沢幸江	4. 巻 58
2. 論文標題 保育園児の摂食機能発達のための食育活動とその評価	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 和洋女子大学紀要	6. 最初と最後の頁 129-139
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計20件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件)

1. 発表者名 遠藤純子・小野友紀・池谷真梨子
2. 発表標題 離乳期の食事援助に関する研修ツールを用いた園内研修の分析
3. 学会等名 日本保育学会 第73回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 小野友紀・遠藤純子
2. 発表標題 乳児保育における食事援助に関する研修ツールの必要性についての検討
3. 学会等名 日本保育学会 第72回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 遠藤純子・小野友紀・池谷真梨子
2. 発表標題 A study on the quality of infant care in Japan: Focus on the primary caregiving system at mealtime in nursery schools.
3. 学会等名 OMEP Asia Pacific Regional Conference 2019 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 遠藤純子・小野友紀・池谷真梨子
2. 発表標題 保育所に勤務する栄養士等を対象とした離乳期の食に関する質問紙調査(2) 経験年数・研修機会に着目して
3. 学会等名 日本乳幼児教育学会 第29回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 池谷真梨子・小野友紀・遠藤純子
2. 発表標題 保育所に勤務する栄養士等を対象とした離乳期の食に関する質問紙調査(1) 保育士との協働・0歳児との関わりに着目して
3. 学会等名 日本乳幼児教育学会 第29回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 遠藤純子・小野友紀
2. 発表標題 小規模保育園Aにおける乳児保育の食に関する園内研修の事例的検討
3. 学会等名 第4回保育者養成教育学会研究大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 遠藤純子・小野友紀
2. 発表標題 離乳期における食事援助の検討(1)： Eating - Feedingの相互模擬演習を体験した学生の気づきから
3. 学会等名 日本保育学会第71回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小野友紀・遠藤純子
2. 発表標題 離乳期における食事援助の検討(2)：多職種参加型園内研修でのEating - Feedingの相互模擬演習を体験した保育士等の気づきから
3. 学会等名 日本保育学会第71回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 遠藤純子・小野友紀・池谷真梨子
2. 発表標題 0歳児保育における食事援助に関する調査研究(第1報)～保育所での離乳食に関する協働について～
3. 学会等名 第65回日本栄養改善学会学術総会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小野友紀・遠藤純子・池谷真梨子
2. 発表標題 0歳児保育における食事援助に関する調査研究(第2報)～乳幼児の食に関する学びについて～
3. 学会等名 第65回日本栄養改善学会学術総会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 遠藤純子・小野友紀・池谷真梨子
2. 発表標題 保育所における離乳期の食事援助に関する現状(1) 0歳児担当保育士を対象にした質問紙調査の結果から
3. 学会等名 日本乳幼児教育学会第28回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小野友紀・遠藤純子・池谷真梨子
2. 発表標題 保育所における離乳期の食事援助に関する現状(2) 0歳児経験年数・研修参加との関連
3. 学会等名 日本乳幼児教育学会第28回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小野友紀・遠藤純子・池谷真梨子
2. 発表標題 保育士養成課程における0歳児の食に関する学びの検討 0歳児担当保育士を対象とした質問紙調査の結果から -
3. 学会等名 第3回日本保育者養成教育学会研究大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 並河香代子, 末次敦子, 小野友紀
2. 発表標題 保育所給食現場における新任栄養士の悩みと養成校での学びに関する調査
3. 学会等名 第65回日本栄養改善学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 久保麻季, 酒井治子, 曾退友美, 林薫, 池谷真梨子
2. 発表標題 子どもの食を支える力とは～グループインタビューを通して保育士と栄養士の比較～
3. 学会等名 日本公衆衛生学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小野友紀・遠藤純子・池谷真梨子
2. 発表標題 0歳児クラスの食事援助のあり方の検討～映像を用いた多職種参加型園内研修をもとに～
3. 学会等名 日本乳幼児教育学会第27回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 池谷真梨子、柳沢幸江
2. 発表標題 保育所における手づかみ食べの程度による園児の特徴についての検討
3. 学会等名 日本栄養改善学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 小野友紀、池谷真梨子、並河香代子
2. 発表標題 保育所における食物アレルギーの対応～初めて食べる食品の取り扱いに関する実態調査～
3. 学会等名 日本栄養改善学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 須永美幸、小野友紀、菟川摩有、佐藤七枝
2. 発表標題 公立保育所に通う幼児の共食状況 - 朝食の共食と保護者の食意識、年代および兄弟の有無との関連 -
3. 学会等名 日本栄養改善学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 遠藤純子
2. 発表標題 保育実習に対して学生が抱く「不安なこと」に関する記述の分析 不安に内在する意味に着目して
3. 学会等名 日本保育者養成教育学会第2回研究大会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 太田 百合子、堤 ちはる（編）安部眞佐子・池谷真梨子・太田百合子・鈴木八朗・高橋嘉名芽・多田由紀・堤ちはる・林典子・藤井葉子・藤澤由美子・本山陽子	4. 発行年 2019年
2. 出版社 羊土社	5. 総ページ数 192
3. 書名 子どもの食と栄養	

1. 著者名 小野友紀	4. 発行年 2018年
2. 出版社 中央法規出版株式会社	5. 総ページ数 144
3. 書名 自信がもてる！ 育ちを支える食事の基本	

1. 著者名 駒井美智子・関根久美・山本智子・城真衣子・廣部朋美・鳥海弘子・池田純子・遠藤純子・橋爪けい子・加藤あゆみ・吉濱優子	4. 発行年 2018年
2. 出版社 大学図書出版	5. 総ページ数 144
3. 書名 乳児保育	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	小野 友紀 (Ono Yuki) (70574903)	大妻女子大学短期大学部・その他部局等・准教授 (42676)	
研究分担者	池谷 真梨子 (Ikeya Mariko) (50633129)	和洋女子大学・家政学部・助教 (32507)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------